

北の鉄道風景

Train number; 222M

2023.12.29 15:01

1/400, f/6.3, ISO 200, f=58mm, Daylight/Sunny

8256×5504 Raw

第132回

私の行く道

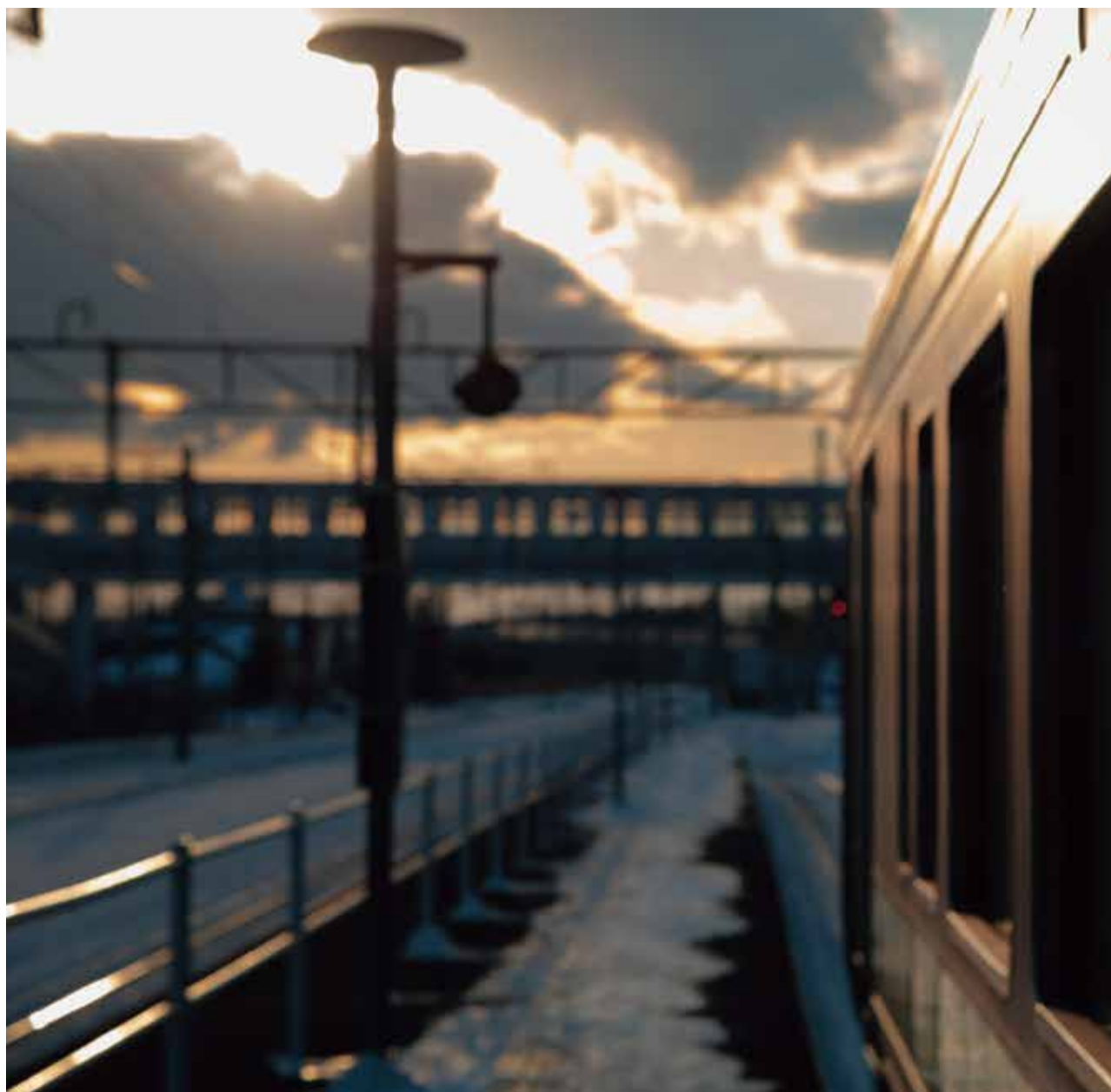
「今、『君の行く道は…』っていう曲が流れてきたんだけど、今どきの若者、この歌詞にはついていけないんじゃない？」とラジオを聴いていた老妻に話しかけられて私も遠い記憶の歌詞を手繰（たぐ）ってみる。「君の行く道は果てしなく遠い…」あ、この段階でもうだめだ。コスパが悪すぎる。無理。続く「歯をくいしばり」も、そんな若者はマラソンか駅伝でしか見たことがない。その辺にいたらパワハラがあったのではないか、いい歯医者知っているよと気を回さなければいけないだろう。

その一方で、果てしない道をどこまでも行くことに今なお憧憬を禁じ得ない自分に気づく。あの頃、卒業式後の謝恩会で肩を組んでよく歌った、そんなことへの郷愁か。いや、違う。

クルマを持つのをやめて四十年。クルマも高いし、保険料、税金、駐車場代、車検代などを足せば相当の額になる。それでも必要だという人がクルマを持てばいいのであって、私なんかは公共



蒸気機関車の引く列車は揺れもリズムも「若者たち」の曲そのものだった。口ずさんでいるうちに歌詞の中の「君」は蒸気機関車を指しているように思えて胸を熱くする若い私だった。室蘭本線 1973



写真と文＝眞船直樹

交通やレンタカーを駆使すれば十分生活できるし、それは地球にも交通弱者にも優しいからこんないいことはない。何よりも歩くと気持ちがいい、これが最大の理由だ。

なぜ、歩くと爽快なのか、まず、歩くための構造になっている人体本来の使い方をしているから。さらに、歩く速度で入ってくる情報くらいが脳にも適量なのだろう。これも心地良い。心身ともに適切な使い方をしていればこそ得られる爽快さだ。

ところが、より楽に、速く、遠くまでという欲望はやがて交通を発達させ、人類に人体の本来の使い方を忘却させることになった。これでは病気になるって当然だ。だが、楽に、速く、遠くまでという欲望と、歩くという行為を両立できる方法がひとつある。列車に乗って面白そうだと思ったら降りて歩けばいいだけだ。当然事前情報は毒ではない。未知という、冒険への最高のモティベーションを自ら捨て去る愚行だ。そして、気に入ったらなおのことSNSには投稿しないことだ。